

「市井鬼」による中途半端なコンプレックス脱出
——犀星の第二期小説創作について

劉 金 拳

Summary

Unsuccessful Efforts to Shake off Complex by Portraying Philistine ——About the Second Period Writing of Saisei Murou

LIU Jinju

There are various wordings about the nature of Saisei Murou's literature, among which "for revenge purpose" is the most popular one and can be looked as a representative. But, besides all that, as a foreigner, I consider Saisei's literature substantially explicate his efforts to shake off his own complex as well as the process of his efforts. This essay, by drawing its support from psychology, through his description of the characteristics of the philistine and his analysis of other materials, proves that "expressing emotion and prettifying the world" and "wild nature" are all the means to extricate from complex, and the inevitability of Saisei's writing style's development from his first writing period to the second period, from "expressing emotion and prettifying the world" to "exposing and depicting wild nature". But due to Saisei's rigidly adhere to his own dark past, his strong self-awareness and his unsatisfactory writing skills to socialize and popularize the materials, it is doomed that in the second period of his writing he could not extricate from complex successfully and completely.

0. はじめに

犀星文学の特質に関して、今まで多くの言い方があるが、犀星がある時自ら自分の文学を「復讐の文学」と称したことがあるせいだろうか、多くの研究者たちはそれを容認し、「復讐の文学」だと主張してきた。その「復讐」とは、自分の文学作品を通じて、人生のすべてには復讐するとのことをさしている。が、外国人の私には、犀星の全ての作品は彼がその一生のうちに負わざるを得なかったコンプレックスから脱出する努力とその過程を描いたものだと思われる。

これを裏付けるために、小説を中心に、犀星の文学作品をいろいろと調べて、前には犀星文学の特質（1）、そして、その第一期の小説創作におけるコンプレックス脱出の試みを検討してみたが（2）、ここでは、彼の第二期の小説創作における中途半端なコンプレックス脱出について探ってみようと思う。

方法として、やはり「経験のない心理なぞ決して表現できるものではない」（3）、「どの人物も作中では私の分身であり、遂に私の悪を吐きつくすために登場するやうなものである。」（4）などといった犀星の言に照らし合わせ、その作品に即しつつ、心理学の角度から作風と主人公の性格の分析を進めていこうと思う。

1. 作風の転換

よく指摘されるように、犀星文学には、「叙情性」と「野性」という特徴的な二つの側面がある。「叙情性」を特徴とする初期三部作が成功した後、犀星は「野性」を特徴とする第二期の「市井鬼」物を展開して再び大成功した。第一期において何もかも美化する犀星は、第二期に入っては、もう自分の生い立ちや境遇を隠したり、美化したりせず、すべてを告白し、醜さ、あらあらしさ、野性の本質をえぐりだそうとするのである。この両期の作品はまるで違った世界のものである。このことをどう理解すればいいだろう。

この豹変振りを理解するには、探求すべき問題が二つあると思う。

1.1 「叙情性」も「野性」もコンプレックス脱出の方法

ここで理解しなければならないのは、「叙情性」にしても「野性」にしてもいずれもコンプレックス脱出の方法に過ぎないことである。これは心理学の角度から考察すれば、理解しやすくなると思う。

コンプレックスの克服方法について、宮城音弥氏は「劣等感・その本体と克服」（5）において、具体的な分析を行ったことがある。彼は「補償（代償とも言う。劉注）」という現象は劣等感を調整し、補おうとする動きと考えられるが、劣等感の心理学において、欠くことのでき

ないものになっている」、「『補償』という現象は、劣等感を問題にする時に、もっとも重要なものである。」と強調して、「補償」の働きを重んじる。彼の説によれば、劣等感コンプレックスの補償は次の四種類に分類できる。ちょっと長いが、引用させていただこう。

第一は、みせかけの補償である。実際には能力がないのに、ありそうなフリをする。

(略) 防衛補償ともいうことができる。

第二は、打勝ち補償または有効補償である。(略) 能力のないものや、性格の弱いものがこれを克服し、その能力を人一倍のばし、また強い性格となる場合である。

第三は、なぐさめ補償ともいうべきもので、空想を描き、架空の世界で自分が強力な人間になったと考えるごとき場合である。

第四は、派生補償であって、頭のよくない子供が、ちゃんとおじぎをして先生にほめられようとするように、別のものでそれを補おうとするものである。

と、「補償」の具体的な現れを指摘する。

また、劣等感コンプレックスを抱く人について、次のように指摘している。

まず、やたらに当り散らすことによって劣等感を補償する。このような「運動爆発的補償」を土台にして意識的、意思的要素が加わったものが非行少年や犯罪者に見られる暴力による威嚇である。「攻撃的補償」といえよう。

強そうに見せようとするのは、「見せかけ補償である」が、このうち、無意識的のものは「偽態的補償」であり、これに、意識的、意思的要素が加わったものが、「虚栄的補償」である。

フィクションの世界での補償は、前述の「なぐさめ補償」である。これは無意識的に行われるが、この場合、しばしば、他人のつくった想像が利用される。

と、上記した「補償」はいずれも人間の意識と関係があるとして、「補償」における「意識」の作用を強調する。

また、河合隼雄氏は「コンプレックス」(6)において、

コンプレックスの力が強くなるにしたがって、自我はその安定をはかるために、いろいろな手段を用いる。これがいわゆる自我防衛の機制である。自我にとっては、まずコンプレックスを完全に押さえつける。すなわち抑圧の方法が存在する。(略) なかなか抑圧しきれないので次の手段として他の機制に頼ることになる。(略) 代償ということもよく用いられる自我防衛の方法である。

と指摘し、「各人の心に荒れ狂った感情の嵐、これがコンプレックスの『解消』には必要なのである。」と強調する。

さて、このように、宮城氏は「見せかけ補償」、「打勝ち補償」、「なぐさめ補償」、「派生補償」、「攻撃的補償」という言い方を、河合氏は「抑圧」、「代償」という言い方を用いて、コンプレックス克服の方法を指摘している。言い方は違うが、同じことを言っている。これを犀星の理解に援用したい。文学創作を「派生補償」の道として選んだ犀星は、第一期において、「見せかけ補償」と「なぐさめ補償」を用いて、自分の心の中に潜んだコンプレックスを「抑圧」し

て、「抒情性」豊かな作品を創作し、「打勝ち補償」に成功して、詩人としての地位を固めたと同時に、小説家としても不動の地位を築き上げたが、これだけでは根本的にコンプレックスから脱出できないと悟り、「攻撃補償」をとり、「野性」的な小説を創作するようになったのではないか。つまり、「叙情性」も「野性」もコンプレックス脱出の方法であったのである。

1.2 「叙情性」から「野性」へ転進する必然性

犀星の詩から小説への転進については多くの研究があるが、その「叙情性」から「野性」への転進に関しては、小説方法の角度からの分析はあっても、心理的な必然性についての分析はないようである。例えば、周知の通り、初期三部作成功の後を追った濫作から、第二期の「市井鬼」物の展開を世に問うまで、犀星には長い沈滞期間がある。船登芳雄氏は「室生犀星における小説の方法」(7)において、この原因は「詩の方法」と「小説の方法」が未分化のままに小説作品に使われたことにありとし、「この経過においては、初期三部作の成功は決してプラスに作用しなかったのである。いわゆる小説の方法を確立しようという主体的努力を怠り、詩と小説との画然たる区別もない」とした上で、第二期に入って、「詩の否定の上に、漸く『小説の方法』を発見した『市井鬼』物の展開において、いわば女のプリズムを通して、人生的、社会的な広がりを実世界から切り取ってくる作品形象を果たし」て、再成功したと指摘し、その創作方法転換の効果を検討しているが、「叙情性」から「野性」へ転進する必然性については論じていない。

心理学的角度から犀星の置かれている状況を考えてみれば、その原因が理解できるはずである。

第一期の小説において、犀星は、美化的で、抒情性豊かな作品を創作して、自分の暗い過去を隠し、完全無欠な世界を描き、その中で自己陶醉することを通じて、一時的に自分のコンプレックスを忘れよう、或いは薄めようと努力した。ところが、その美化があくまでも心理的な逃避にすぎないもので、これだけではとうてい自分の心の底に強く根ざしたコンプレックスから脱出することに成功できず、心理的な傷を癒すこともできないと痛感して、河合氏の「なかなか抑圧しきれないので次の手段として他の機制に頼ることになる」という指摘もあるように、犀星は違う方法をとらざるをえなくなった。もちろん、この段階に入り、かつての放浪にやせた青年ではなくなり、文壇においてすでに大家と認められて、一定の社会地位を築いた犀星には、暗い過去を告白し、自分の並々ならぬ努力ぶりを披露すれば、自分の得た名誉が影響されないばかりか、人々の同情や関心が集められ、知名度が一層高められるのではないかという考えがあったのかもしれないが、徹底的にコンプレックスから抜け出るために、思い切ってその元にメスを入れるという決断を下したということこそ根本的な原因ではなからうかと思う。創作方法の転換は心理的な変化によるものである。

つまり、「各人の心に荒れ狂った感情の嵐、これがコンプレックスの『解消』には必要なのであ」って、犀星も「まず、やたらに当り散らすことによって劣等感を補償」しようとしていたと考えられるのである。犀星は「善き人間も能く見れば悪いところを通つてきて善くなつて

る。はじめから善い人間というものにはならない。(略)私は最近に比較的人間の醜悪面をみがくことによつて、美と善とを感じてゐた。悪を搾木にかけて見ると善が剥ぎ出る」から、「市井鬼の間をさまようやうになり、(略)野生的で、一目で見れば悪い主人公」(8)を描くようになり、「これらの作品を土台にしてある機会に私は物凄く暴れてみたい気がする」(9)と、自分の「市井鬼もの」の創作理由を説明したが、上記した両氏の説に照らせば、犀星本人にも察知されていないコンプレックス脱出の努力がその底に働いていることが明らかになってくる。創作の段階から見ると、犀星が確かに河合氏の指摘通りに一步一步と歩んできたのが分かる。暗い過去とそれによつたコンプレックスを克服しようとするために、「派生補償」の手段として、文学創作に没頭する犀星は、詩集の出版と「中央公論」に小説を連載することに成功したことを通じて、文学界への登竜門に入り、「打勝ち補償」を果たした。しかし、彼は第一期作品において、コンプレックスを「おさえつけ」ようとするために、「美化」の手法を取り、「抑圧」したのである。結局「抑圧」か「虚榮的補償」だけでは不十分だと感じられ、「なかなか抑圧しきれないので」、「代償」などの手段を通じて、コンプレックスを解消しようと努力するようになったわけである。その時、まずとられるのは、「荒れ狂った感情の嵐」或いは「爆発的な補償」という「野性」的な方法である。この方法として出身と生い立ちが芳ばしくなく、社会の底を生き抜いてきた犀星は、「市井鬼」の生活を描いたのである。この「物すごく暴れてみたい気」は、当時の犀星には、市井鬼ものの形でしか表現できないものであった。

なお、自分の暗い過去を暴露する原因についても心理学的角度から補足しておきたい。心理学者のエリクソンは、成長するにしたがつて、人間は「自我同一性」を求めるようになるという「自我同一性の理論」を主張している。第一期創作中の犀星は、まだ同一性拡散という自我の不安定な心理状態のままであるが、段々と「自分が自分であること」という明確な意識を持ち始めて、自然に精神的に安定した状態にあることを目指す「自我同一性」を追求して、自分の過去を暴露するようになったと思われる。「人間は或る地位に達すると、例へば家庭の父親であつても、大臣とか高官とか、偉い音楽家になつても、時々、彼自身の地位とか名誉とか信頼とかを、或る日には美事に叩き潰して見直す必要がある、得体のわからない仲間の中に、自分を見定めることで、さらに人間といふものを立て直してみたいのである」(「杏つ子」)。「年をとると、本物だけになつて、生き返つてゐるところがある」(「蜜のあはれ」)という犀星の話は、それを裏づけると言えよう。具体的に言うと、第二、三期の文学活動は、同一性獲得の努力の成果として、犀星のナルシスチックな自己憐憫から、一段階成長したことを示している。

このように、第一期の作品を「自分で意識して詩的な出駄羅目を書い」た(10)ものにすぎないと自ら否定し、次第に創作方法を変えて、より徹底的にコンプレックスを乗り越えるために、犀星は「あにいもうと」、「復讐」、「弄獅子」、「聖処女」など「市井鬼」物と称する野性味溢れる小説を創作するようになったのだと思われる。自分の暗い過去を告白するに留まらないで、自分の本心にもかかわらず、複雑な原因によってできた「爆発」を、文学作品というフィクションの世界において、自分にできないことや実行したいことなどを、理想像として作り上

げた人物に任せて、それらの人物のなりふりかまわぬ行動を通じて、自分の内部に深く潜んだコンプレックスから脱出を図ったのだ。

2. 赤裸々なコンプレックス脱出努力

この時期の創作活動と心境について、犀星は

私の第三期の仕事は「あにいうと」と前後してはじめられ、おもに街、——市井の人間を素材として書きつづけた。私の小説といふ小説には善良な無頼漢が相絡んで、頭の中の街にあふれた。長編の鬱なかつた私は『復讐』といふ小説を六百枚書き、『聖処女』三百枚を書き、『弄獅子』を二百枚書き、『女の図』前後二百枚を書き、『戦へる女』六百枚を書いた。そのほか四五十篇の短編を相次いで書いて、暴れ廻るやうな気持ちだった。

(11)

という。では、犀星はどのようにあばれまわったのか、この時期の代表的な作品を中心にして見ていこう。

犀星の「市井鬼」物は、虚構による作品と、「弄獅子」に集約される自伝風なものに、大別される。

2.1 虚構作品における脱出努力

この時期における犀星の代表的な虚構作品には「あにいうと」、「復讐」、「聖処女」がある。

「あにいうと」は東京に出て学生に騙され、身ごもった長女もんを中心にして、河川工事の夫頭赤座一家のことを描いたもので、映画化もされたものである。「聖処女」は妾上がりの女が生んだ、しかもキリスト教孤児院という逆境に育った処女でありながら、孤児院を脱走して、その美貌と歯切れのいい性格と才気とを武器にし、幸福をつかむため、世の中を巧みに生き抜き、ついに美男子と結ばれ、幸福を得る物語である。この小説は、手に汗を握るほどの迫力に満ちたものだとして評価されたこともある。「復讐」は、田舎の没落旧家の娘である繭子と、不倫を隠す偽装結婚の犠牲である衛子を中心に展開し、悪党の波田野門と譲なども登場させながら、主に門三郎、庄司孝、松崎季風、奈良平助など新時代に生きている青年達がそれぞれの矛盾を解決して、円満な生活をするようになったことを描いたものである。その「序」の中で、「この物語はこの後に私の求める人生の紛糾を十分に暗示したものであることを信じる。つまり私は本篇では主人公といふ定石を外して凡ての主要人物を、ほとんど、その轡を揃えて押し出して行つたところに、些か私の自負もあつたのである。」と、犀星本人の評価もある。

犀星の小説と詩には、「非常に激しい野蛮なものであると同時にそれが非常に柔らかな平静なものである」(12)という二つの面があるという堀辰雄氏の指摘がある。これは心理学上の、「同一個人に異なった二人の人格が交互に現れる現象で、両者の間に自我意識の連続のないものである」(13)と呼ばれる「二重人格」の違った形の現れではないかと思われる。犀星の「市井鬼もの」の主人公は、いずれも反抗的で、野生的な一面があり、と同時に、善良で優しい一

面を兼ね備えている性格として描かれている。これらの主人公の二重の性格は、さながら作家犀星のコンプレックスとその「補償」を求める精神の表れだと思う。

2.1.1 反抗的で、野性的な一面

「あにいうと」の中のおもんは、

生涯の嫌悪の対象であり、今まで作品の上では捨象して断片的にしか描くことのできなかった義母の赤井ハツの若い頃の姿を想像し、小説の主人公おもんとして造形して、始めて真正面から対決する。すべて本質まで見据えようと覚悟したとき、ハツは単なる嫌悪の対象でなくなる。底にまぎれもない女を、一人の人間を発見する。悪女の中に、庶民の抵抗と、女の抵抗を見いだそうとする。(14)

と奥野健男氏に評価されたが、より重要なのは、悪女でありながら、反逆的に精いっぱい到自己流に生きた莫連の女を描いて、この不遇の女の戦いを通じてこそ、犀星は一時的に自分のコンプレックスから逃れ得たというところではないか。特に、「男に騙され、東京から帰ってきているもんには、東京の放浪生活に疲れては帰郷を繰り返す若き日の犀星自身の影が落ちていないとは言えない」(15) ように、明らかにもんは犀星本人の分身でもある。

もんは次のように描かれている。

ぐれ出したもんは奉公先で次から次と男ができ、こんどは小料理や酒場をそれからそれと渡り歩いて半年も帰つて来なかつた。帰つて来るとだらしく寝そべつて何かだるそうに喘いでゐるような息遣ひで、りきをあごで使つてゐた。

と、いかにもだらしない姿である。しかし、尋ねに来た小畑が殴られたことを聞いて、いつもは苛められても無口な彼女は、

きあ、といふやうな声で驚きとあらはしたわめき声をあげると、畜生めとあらためて叫びだして立ち上がつて言つた。

——極道兄きめ、誰がお前にそんな手荒な事をしてくれと頼んだのだ。(略) それに誰が踏んだり蹴つたりしろといったのだ、卑怯者、豚め、ち、道楽者めと、兄を罵った上で、

もんは嘗てないほど気ほひ立つていきなり伊之に掴みかかり、その肥つた手をべつたりと伊之の顔に引つけたなと見ると、伊之の目尻から頬にかけて三すぢの爪痕が搔き立てられると、腫れたあとのやうに赤くなり、すぐにぐみの汁のやうなものが流れた。

と描写され、とうてい救いようのない、野性的な女性に見える。しかし、この何も怖がらぬ反逆ぶりは、恰も犀星の「物すごく暴れてみたい気」の現れである。

「復讐」の中の繭子も衛子も同じ野性に富んだ人間である。繭子の野性と反抗ぶりについての描写はあまり多くなく、二つの場面に集約されている。一つは欲の深い兄の譲が物置部屋で金にできるものを夢中で探して、全然他人のことを考えないのを見て、繭子は「これが兄さんであるからいいものの、少し位恥かしいことを知つてゐてもいいわ。自分で都合がわるくなるとわたしを抱き込もうとなさるし、都合のよいことではまるで吐き出しさうになさる。何処に

兄さんらしい愛情があるの。」「あたし恐ろしくなつたやうな気がするわ。兄さんが余り驚異して何度もあたしを騙したり取り入らうとしたりなさるものだから。」と、ずばりと兄を責める場面である。もう一つはレストランに勤めたとき、妊娠したということだけで周りの女中たちに散々苛められて、結局、ある晩、女中の矢崎つまにからかわれた時、逆上して、矢崎を殴った場面である。

繭子のかつと逆上せて了つた。そして香木に逢つたせゐで気持が張つてゐたのか、いきなり矢崎つまの鬢太を一つびつちりと殴打いて了つた。これは自分でも思ひがけない素早い遣口だつた。

「何をなさるんです。」

矢崎つまはまつかになり、今にも泣き出しさうにしながら、繭子の襟元に飛びつかうとしたとき、繭子は再び矢崎つまの頬を力一杯引つばたくと、うしろ退きざりしながら凝つと眼を据ゑて身構えた。上州高原に野育ちにされ、したたかな悪党を二人まで兄に持つた繭子の顔は、嘗て故郷の寺院のやうな廃屋のなかを、のろりのろりと歩いた野性のある繭子そつくりであつた。

とあるように、野性が「爆発」したら、非常に怖い人間である。

繭子より、衛子の野性はもっとすごいものである。例えば、庄司と伴子の不倫に、二年もの間ずっと我慢していたが、最後に、庄司と打ち明けて話をする時、「わたしを苛めないで頂戴、もう沢山。これ以上わたしを窮らせるのは人間のすることぢやないわ。初めから人間のする正しいことではなかつたけど、これ以上もうわたしは我慢することはできません。」「なんて恥かしい方です。まるで畜生のやうなお心でいらつしつたんですわね。」「二年も一緒にゐてわたしは始めて人間らしい口を聞くんです。」と責めたりする。結局その反抗ぶりに、「あんな鳩のやうな女が意地づくになると物凄いくところがあるものだ」と、庄司が冷然と少しも興奮しないでちつと考へ込んだ」と描かれている。

また、たった一回ベッドをともして繭子に妊娠させたということを否定しようとする門を、「卑怯者ね、女を知らない人ね。ああ何んてあなたは厭な人だか。」「卑怯な方ですとも！何度言つてもおなじことですわ。」と吐き出すように容赦なく責めている。

おまけに、色々と苦しんだ繭子に、「相手は何処にでもゐますわ。もう一遍、門さんをお食ひちらしてあげたらどうでせう。あんな人！骨まで食ひちらしてやると好いわ。」と教えたりする。その大胆不敵な言葉を聞いて、「繭子も野性は持つてゐたが、衛子の野性ではない意識的なやけくそには、繭子はすつかり参つて了つた」のである。

一方、「聖処女」の中の閃子は、「作者は憧れの美貌の女性の中に自己を一体させ」、「生母のやさしさ美しさと義母の野性、痛快さの両者を兼ねた現代に通じる女性」(16)と評されている。その魅力は尾崎士郎に「かくのごとく奔放と純情とを合わせ備えた処女の姿は、日本文学のどこにも表れた事のないところのものである」(17)と指摘されたごとく、その純情と大胆不敵さにある。その純情と美しさは、灘孝と蒲原泰介、この二人の言動を見れば想像がつくだろう。

灘孝の目からは、

上瞼のえも言われないふくらがりに上気した色が、電灯の明かりを真つ正面に浴びてゐて、そこだけをちゅつと接吻するだけでも、ばか者の灘孝は一万六千円を投げ出したかも知れなかつた。

しかも、自分の心の汚さと比較して、灘孝は

おれの様な下等な人間はあんな女を見ると、見てゐる間だけ真人間になれるんだ。おれはそれだけでけつこう援かるのだ。おれは下劣な考えで対つていきながらついにそれを出さずじまひになるところがたまらなくすきなんだ。

と、高く閃子を評価する。

蒲原の目からは、

蒲原泰介といふこの人物は何やら異なつた所のある清潔過ぎるやうな閃子に一瞥を加へた時に、微かにではあつたが、弾き飛ばされるやうな不思議な清純な感じを受けたのであつた。この不思議な清純に肖た感じは却却邂逅の出来ない物希しいものであり、そしてそれは得難い美しさの骨組みのやうなものであつた。

とあるように、大変清純な処女として描かれている。

が、その清純さと裏腹に、閃子は野性と反抗性に富んでいる。

孤児院にいる時、彼女は何度も舎監に大胆不敵に反発する。その挙句、さすがの舎監も、「閃子を監視しながら滑稽なほど閃子に優しく、落ち着かせやうとした。」のである。母と姉の手におえない悪党の榊葉金次についても、「これから一切お母さんを虐めないお約束をなさるなら、これだけは上げるのよ。」「ほんとに叔父さん！もう来ないでわたし達を静かに暮らさせて置いてちょうだい、叔父さんがいらつしやると皆が面白くなるよ、それにお母さんが、悄気ておしまひになるしお可哀そうよ。」とずばりと責めた上、「爾今一切金銭上の事に就いて迷惑相懸申すまじく…。」という内容の証文を書かせて、問題を徹底的に解決する。また、実父に会うことを長い間心の中で望んでいたが、実際結城専造に会ったら、「突ツ立つたまま」で、「勝手にお母さんを置去りした方が今時おたずねになるなんて、ずるぶんお勝手なおもひやりですわね」、「もうおかへりになるといいわ。一生訪ねていらつしやらないようにご忠告して置きますわ。お母さんの背後に私が付いてゐるわ。」と、「瞬いて涙ぐんで腹たたしげに喚き続けた」のである。そして、女給の生活を体験するために、一晩カフェーの中で働いてみたが、勝手に自分の手をとろうとしたお客の手を「思わずびしつとどやしつけた」という。また、家族の生活を負担してくれたり、就職先を斡旋すると約束してくれたりする蒲原泰介が、姉のほかにも多くの女の子と付き合っていることが分かった時にも、閃子は、「あんな人は利用してやる」といいわ。どつちにしてもお金に困つてゐないのだし、利用して突つ放してやつてもいいくらゐよ」、「悪いずるい人間にはそれ相当な裏を搔いてやるのがいいよ。」と心の中で決めて、蒲原を利用する一方、「ぢや、兄さんは犬か畜生ね！畜生の中でもとても劣つた畜生なのね」、「恥知らずの畜生みたいな兄さん」、「もつと蹴飛ばしてやるわ！皆さんの見ていらつしやる前だつて私些つとも恥ずかしいわ。」と、思う存分に責めたり、罵ったりするのである。彼女の

性格は、蒲原本人の感覚から見る時、一番説得力があると思う。蒲原の目に映った閃子は「色は寧ろ幾らか灰色ばい白さであつたが、眼は物事に遠慮するとか、敢えて気取つたりすましたりするところがなく、野放図に大胆に相手の目に見入つた瞬きをしなかつた。その清らしい人を怕れないところが蒲原には余程異つた気質と境遇とを考へさせた。」のである。

なお、仕事を自立の手段としてずっと考えてきたが、いろいろなことがあつた挙句、仕事中心ひそかに自分に恋を示す詩を書いた松方が首にされたことを契機に、会社のやり方を「ずゑぶん残酷なお仕打ち」とずばりと責めて、自ら「私の仕事までが他人の力添えで見とめてゐられるなら、こんな会社にあたくごさいません。私、今日限り辞めさせていただきます。」「もつと立派な、もつと堂々としたお勤めがしたいです。」と言って、潔くやめてしまっている。

このように、「なぐさめ補償」を求め、自分の力や能力ではできないことを、際立って逞しい性格を持ったヒロイン達の言動を通して、作者は何もかも恐れずに「爆発」し、痛快に振る舞って、自分の心の中に潜んだコンプレックスをつき破ろうと努めたのである。

2.1.2 善良でやさしい一面

これらの一見すれば、野性的で、反抗的な人物は、一方で皆やさしい心を持っている善良な人間である。

「あにいうと」のおもんは、ふられたが、小畑への愛を忘れずに、小畑がたずねてきたことを聞いて、「ちよといい男ぢやないの」と言ったり、

あの男からあとに男ができてあんなにあるだけのものを好きになれる男なんてなかつた。小畑には宥せるものでも他の男には宥せないものがあり、小畑よりずっといい男であつてもそのいい男すぎるのが気障だつたりして、ちやうどいい頃加減の小畑とくらべるともの足りない。

などと、本音を吐いたりする。そして、小畑が兄に殴られたのを聞くと、既述の通り兄にくつてかかってゆくのである。

「聖処女」の閃子は多くの人を助けている。例えば、コックさんの私生児の条次や、孤児院脱出を図る満知子や、客に侮辱され、逃げてきた女給の森かよこなど。更には、孤児院を脱出したらどう生活をしていくかについての見通しも全然立たないのに、友達の春木を見捨てずに連れ出して、別れるまでずっとその面倒を見る。最後には松方を助けるために、そして、会社に抗議するために、自立の手段と考えた仕事までやめてしまうのである。

「復讐」では赤裸々な野性の爆発もあるが、主に描写されるのは、繭子の善良さである。例えば、初めて門に会つた時、

「わたしは何も知らない女でございます。田舎でずっと暮らしてゐてお取りなしだつてできませんわ。でも旅館の女中さんのお役目くらゐはいたします。」

繭子は自分でさう言つて、いつもとはちがつて非常にオドオドしてゐるに拘わらず、何でも門の好きなやうにして上げたい心でいつぱいであつた。すくなくとも門が自分の美しくないのに絶望したのではあるまいか、少しでも厭さうな気振りを出しはしないかと、そ

ればかり気がかりになつてゐた。

とあり、そして、妊娠のことを後付けに来る門に、

わたしかういふ身体になつてもあなたにご迷惑をかけない心算でゐたのでしたけど、兄がああ通んな人なものでございますから、致し方ございません（略）。

ほんとはわたしがあの晩参らなければよかつたのだと、このごろ考へてゐますの。けれどあの晩どういふものかお目にかかりたうございます。この間からもお会ひしたく思うてゐました。これでわたしの願ひがかなうたも同様ですから、もうお目にかからなくとも、お恨み申し上げるやうなこともございません。

と、自責している。いかに善良な女性であろうか。

こんな図抜けた優しさだけに、「貸金を取りに歩く酷薄漢」である兄の譲も、「繭子は決して僕とはゐたがりません。潔白な女なんですからね。」と反省させられ、物凄い野性の持ち主である衛子も、「あなたはそんなお身体でゐて能く善良なお気持ちでゐられますわね。わたしなら門さんを許さないのですけど」と感動する。「非常に古風な一面と粗暴な野性とを兼ねて持つ繭子には、門はいぢらしい気持ちで殖えていくばかりであつた」と、門も反省するようになる。

なお、この時期の小説におけるほかの「市井鬼」もこのような性格を持っている。例えば、「あにいうと」の中の赤座。小説の中では、赤座についてはあまり多く書かれていないが、この人物は特に印象深い。その理由は二つある。一つは、何にもめげない、何をも憚らないという強い野性的な性格の持ち主であることで、もう一つは、底辺の肉体労働者で、小畑と比べると、無学だが、素朴で自分の家族に深い感情を抱いているし、何でもできる達人だということである。

「赤座は年中裸で漬で暮らした。」と言う書き出しで始まって、いろいろな不幸に苛まれた拳句、悲しんでいることが描かれているのだが、それらの悲しい一切を胸にたたんで、「船の上で鯨だつて」、人夫に大声を上げて石の投げ入れを命じたという結尾で終わるこの小説は、赤座の自然そのものの野性的な逞しさを生き生きと紙面に躍動させる。この「七つの時から漬で育ち、十五で一人前の石追ひができ、蛇籠の竹のささくれで足を血だらけにして育つ」て、「殴ることがしゃべる十倍の効き目があるといふことを、自然に一つの法則のやうにしてゐる」という野性に満ちた人は、「おもちゃにされ負けて帰つてきたと、考へると、負けたことのない赤座はもんの顔を見たくもなかつた。」と、娘のおもんに立腹する一方、小畑にも憤りを感じていて、「帰りに土手の上におびき出して思ふさまこんな畜生を張り倒し、娘の一生をめちやくちやにしたつぐなひをしてやらうかとも考へてみた。」のである。特に結末部の赤座についての描写はその人間像作りに非常に役立っている。「勢ひを削がれどんよりと悲しんでゐるやうに暫く澱んで見せるが、少しの水の捌け口があると、そこへ憤りをふくんで激しく流れ込んだ」怖くて、力強い川水に、赤座は少しも怯えない。「そこへ石の投げ入れを命じ大声でわめきたてた。そんなときの赤座の胸毛は逆立つて、銅像のやうな体が撥ち切れるやうに、船の上で鯨だつて見え」たと描写され、非常に力強いイメージを読者に与えている。

しかし、この野性的な赤座は、無口だが、決して深い感情を抱いていないわけではない。例

えば、もんと妹のさんの二人が、「赤座の小屋に弁当を持つて」きた時、「赤座は二人の姿を見たきりなんとも言わなかつた。珍しい姉妹が同時に帰つてきても一語も口を利かなかつた。」それでいて、「姉妹が土手の上を帰つていくのを二人が気のつかないうちに、赤座は少時見つめてゐた」のである。ここでは「無言の表現」が極立っている。

仕事上においては、蛇籠作りの名人、それを用いた河川工事の名手であり、日常生活においては、彼は「旨い鮎の味噌汁を作」れるし、ヤスで川鱒をとることも上手で、何でも出来る達人である。このように、平凡ではあるが、河川工事の人夫頭、赤座に、読者は関心を寄せずにはいられなくなる。作者は何にもくじけない理想像を作りあげることに成功し、「なぐさめ補償」を成し遂げたのである。

だが、この時期の作品は、テンポが速すぎて、迫力に溢れてはいるが、十分に人を納得させる力が足りない。後に詳しく分析するが、第三期のものと比べると、この欠点は明らかである。もっとも典型的なのは、「復讐」と「聖処女」の中にある一目ぼれとも言える場面であろう。

「復讐」では、

繭子は最初門を一瞥した時から妙に好きになつて了つた。それは繭子には初めて見る男性的な気品が門にあつて、さういふ意味で女が好きになるといふことは意味深長なものであつた。

繭子は子供が感傷的になると、好きな友達に大切なものを皆呉れて遣つて、その上なほ一層何かを呉れて遣りたいと、あれか、これかと頭で考え悩んでゐるような状態が今の自分に似てゐるやうな気がするのだ。子供はしまひに母や姉の品物まで携ちだして迄、友達の感心を買ふものであつた。叱られる怖さよりも最つと大切なことは友達を喜ばせることにあつた。繭子はそれと同様な気持ちをそわそわと考へて行つた。

と書かれているが、不自然な感じがしてならない。

また、衛子のことをめぐる庄司と香木の交渉も順調過ぎるように感じる。

「聖処女」の中において、「青年はなんとなく閃子を打ち眺めたが、閃子は頭のシンが疼くほどその男の美しさにずきんと遣られ」て、「それはちよつとでも今の閃子に触つて来たらあるひはこの聖処女と言へども、ぐつたりとまいつてしまふものかもしれない」と、ただ非常に美しいということだけで、一目惚れしているが、それは「ほとんど水木恭三の機嫌ばかりとるやうな気持ちになり、自分でもそれがおかしいくらゐ不調和なものであつた」という。文章は車に乗って、「二分もすると、閃子は猫の子のやうに水木の手引きくめられ、ぐいと手繰り寄せられた。だが、するとおりにされてゐた。そんな約束だつた。しかも乱暴な水木の手はほとんど閃子の襟脚を殴りつけるやうに力いつぱい抱きすくめ、閃子は目を閉じたまま体を縮めた。」というところで終わる。このような描写に説得力はなく、現実生活にはありえないことで、不自然に思われる。この理由については後で詳しく分析しよう。

2.2 自伝的作品における脱出努力

「弄獅子」は二人の女中を横暴に使う子供たちをしつけようとする作者が、先ず自分の出生

の事実から、自分の出生、育った環境を書いた作品である。作品において、「幼年時代」のような「美化」を捨て、初期自伝小説に見られる生母への憧憬と空想的美化の叙述を、「抒情的な軽蔑に値すべき描写」として厳しく否定したうえで、徹底的に自分の暗い過去を赤裸々に告白し、抉り出している。

例えば、実母については、「六つか七つくらゐの時に二三度くらゐ母の顔を見ただけに過ぎなかつた」「母がどんなことをしてゐたかどんな顔をしたゐたか、薩張り印象してゐるものがなかつた」「僕にしゃべつた母の言葉を思ひ出さうとして見るが、まとまつた言葉が思ひ出せない、特殊な愛情すらも感覺的にのこつてゐないのである」「母が僕に抱きついて可愛がつてくれたとか、僕が甘えて何かおねだりをしたとかいふことなぞ一遍もなかつた」と書かれている。また、「幼年時代」には、父の死後、父の弟が生母を「ほとんど一枚の着物も持ち物も与えずに追放してしまつた」とあるが、この小説では、「生家を出てゆく際に金になるやうな掛け物や陶器、刀剣類を持ち出し、それを売り減らしにして食べていたさうであつた」と書き、第一期の作品における感傷的美化を完全に拭き払う。

義母については、その描写が凄絶というしかない。母という代わりに、「残酷な四十女」、「四十女の腹の汚さ」というふうに書いて、「自分は義母を愛したことは一度もなかつた。むしろ自分は母を恐れる為に生きてゐるやうなものだつた」という。結局、「僕の頭に去来するものは殺人的な考へしか浮かばなかつた」ほどにいたつたのである。その自白から犀星の受けた虐待はいかに残酷なものであるかが伺える。

また、育てられた家族については、「それはまるで無学な人間がより集まつて他人同士が殖民地部落のやうに、一家族をつくりあげてゐた」ものだとし書き、「幼年時代」における優しい隣の寺院の老住職を、義父と明言し、盲いて病床に伏し、養母の「奴隷」になる晩年の生きざまを露わにする。婚家から出戻つたとした姉に至っては、「まつたく娼婦だか芸妓だかわからない女」とし、また無視した兄や妹もそれぞれの相貌を明確にして登場させる。

しかし、この小説の中で、最も注目すべきものは、なくなった義母とあの世からの天使たちとの「お前方は私といふ女を考へて見れば大概この世の女のことはお分かりでせう。私はお前方にお手本を示してゐたやうなものですな」という会話と、義母が地獄を素通つて極楽往生して、「極楽の園生にある木馬の上で、大勢の天使達と遊び戯れてゐた」という空想の場面である。つまり、地獄の代わりに極楽を、そして救いを義母に与えているのである。ここで、犀星は義母を単なる嫌悪の対象としてではなく、本能的に生きた一人の「残酷で無学な」「市井鬼」の一人として描写しようとしている。すでに文壇に大家として認められた犀星は、義母を中心とした「血統」の問題を、自分一人の問題としてではなく、自分の周囲にまで広げ、さらには、その義母の像を普遍化する「市井鬼」物の世界にまで押し広げようと、創作手法の模索を意図し、試みていることが考えられる。

「弄獅子」は、「出生の根源そのものへ直接切り込」み、「出生の内的相克を突き抜け、犀星は自立を成し遂げた」(18)と評価されたことがあるが、確かに犀星はこの作品において醜い生の実相を照らしだし、特に、義母を客観的に対象化する努力によって、自分の暗い過去を告

白し、心の中に絡んだコンプレックスを克服しようとしている。但しここでは、犀星は何も憚らぬ自立を成し遂げたつもりであるかもしれないが、『弄獅子』によって、養母を客観的に対象化し、生い立ちのコンプレックスを克服しようとしても、その母の像を普遍化する市井鬼の世界のフィクショナルな方法がただちに生まれてくるはずもなかった。方法の探索はまだ続くのである」(19)と、東郷克美氏に指摘されたように、方法もまだ探索中だし、犀星本人の思想もまだ十分に熟していないから、精神的な自立が直ちに実ることには至らない。集大成したのは、直接この方法が受け継がれ、努力した第三期のことである。

上記したように、この段階に、犀星は「市井鬼」を主人公にした「衝の文学」を創作し、「暴れまわっ」た。これらの長編の主人公は、全て不幸を背負って生き抜く野性的な一面と善良な一面をもっている市井の女である。いろいろと苦難に出くわしてはいるが、彼女たちはいずれも逆境に屈服せず、虚飾なく生き抜いて、社会と人生に立ち向かい、積極的に戦ったのである。先に分析した人物だけではなく、例えば「女の図」の中の、売り飛ばすためにもらわれ、毎夜酒場をさすらって育った女であるはつえ、貧乏にあえぐ「戦へる女」である六人の美しい娘など、ほかの登場人物も同じである。

3. おわりに——中途半端なコンプレックス脱出

このように、文壇でようやく一定の地位を占めた第一期には隠蔽せざるを得なかった出生と生い立ちの実相を、第二期においては、かつての美化や虚飾を、遺漏なく剥ぎ取り、そのまま暴露している。が、より重要なのは、文学作品というフィクションの世界において、自己のコンプレックスの根本を告白し、これらの何をも憚らぬおもんや、聖処女のような「市井鬼」などの、野性的な一面と善良な一面を兼ね備えている人間像を作り上げ、自分にできないことや、実行したいことの「補償」を求めることである。それらの登場人物の「抵抗」を通じて、犀星自身は、「物すごく暴れてみたい気」を満たして、コンプレックスからある程度解放されるのである。

しかし、先にも述べたように、この時期における犀星は、まだコンプレックスから根本的な脱出ができないでいる。これらの作品について、実は、犀星本人も

他人の小説に描かれた女性は大抵好ましいものであるが、自分の小説の中の女性には何処か無理をして書いてゐるせゐか、比較して好きな方ではない、嘘がはいつてゐたり美しさを無理にこさへたりしてゐるので、これを深く愛するといふことがない。(略) 女性描写は書いてゐる間はかなり一生懸命に気に入れてゐるけれど、書き上げた後、つまり何ヶ月か経つた後には最う飽きてしまふのか、描き足りなかつた故なのか、どうも、これを書いた当時の半分の愛情も魅力をも感じないのだ。(20)

と、その表現力の不十分さに気がついていた。しかし、気がついたといつても、根本的な原因はまだ追究されていないようである。

沢田繁春氏は犀星の「市井鬼もの」に関して、

①言葉の力が持続しないこと②筋たてに客観性が欠けていること③登場人物に対する解釈が一人よがりやで奇怪でさえあること——すなわち、犀星に「文学の経験」はあったかもしれないが、長編小説を書くに当たって必要とされる「人生の経験」において欠けるところがあったということである。長編における成功は、限られた世界においてではあるが、過不足のない経験を積んだ後で書かれた「杏つ子」まで待たなくてはならない。(21)

と、指摘している。しかし、根本的な原因として考察すべきなのは、この段階の犀星が、依然として自分のことに拘り過ぎていて、普遍化、社会化する心構えとその創作方法を十分に身に付けていないことではないか。ここでは、再度河合隼雄氏の所説に耳を傾けたい。

我々の意識は自我を中心として、ある程度の統合性を持っている。それに対して、コンプレックスはそれを脅かすものとして作用してくる。それに対して自我はいろいろな対処の仕方をしめす(中略)対決の過程を経て、コンプレックスの内容が自我に統合されてくるのである。(22, 下同)

さらに、この「対決」における「意識」の働きについて、「自己実現における自我の役割は、いくら強調しても強調し足りない程」重要なものだが、「もちろん、自我のみにしがみついては発展がない」と強調している。「どの人物も作中では私の分身であり、遂に私の悪を吐きつくすために登場するやうなものである」とか、「伴子や繭子や、衛子は本篇物語に於て、私には大した望みを持たなかつたが、不思議なつき詰めた彼女らの存在も、九人の主要人物に比較しては余りに内気であつたとは言へ、それぞれに私の叫びに代わつた人物であることで些か感傷的な回顧すら誘うて来るやうである」(23)と犀星本人が述べたように、この段階において、犀星はやはり自分のことに「しがみつ」きすぎている。このことについては、例えば、「市井鬼」物を通じて、「犀星は自己嫌悪、自己劣性の意識から解放されるのだが、それにしても出生の現実そのものの規定からのがれることができない」(24)との指摘もある。これらの理由により、結局「発展できない」結果となって、創作当時の犀星は「なぐさめ補償」を通じて、十分にコンプレックスから脱出を試みたが、「嘘がはいつてゐたり美しさを無理にこさへたりしてゐるので」、後には「これを書いた当時の半分の愛情も魅力をも感じない」ものになったのではないか。コンプレックスからの脱出努力は中途半端なものとなってしまったのである。

「長編における成功は、限られた世界においてではあるが、過不足のない経験を積んだ後で書かれた『杏つ子』まで待たなくてはならない」という沢田氏の指摘があるように、犀星がやっと自分のコンプレックスから完全に脱け出るのは、人生を歩み、いろいろと体験した後、自分の尋常ならざる出生や成長などを全て普遍化、社会化し、円熟した書き方で作り上げた人間像を通じて努力するようになってからのことである。

注

- (1) 拙稿「コンプレックス脱出の犀星文学——小説における犀星文学の特質を中心に」、『室生犀星研究』第22輯(室生犀星学会、2001)
- (2) 拙稿「コンプレックス脱出の試み——第一期の自伝三部作における脱出の努力」、『室生犀星研究』第23輯(室生犀星学会、2001)

- (3) 室生犀星「小説の嘘」、『文学』（三笠書房、1935）
- (4) 室生犀星「衡の文学」、『印刷庭園』（竹村書房、1935）
- (5) 宮城音弥「劣等感・その本体と克服」（東京書籍株式会社、1979）
- (6) 河合隼雄「コンプレックス」（岩波書店、1996）
- (7) 船登芳雄「室生犀星における小説の方法——初期三部作から『市井鬼』物への展開を追って」、『論究日本文学』（立命館大学文学会、1979）
- (8) 注（4）に同じ。
- (9) 室生犀星「序文」、『神々のへど』（山本書店、1935）
- (10) 室生犀星「神碑」、『文芸春秋』（文芸春秋、1928）
- (11) 室生犀星、「泥雀の歌」（実業之日本社、1942）
- (12) 堀辰雄「新潮」（新潮社、1930）
- (13) 注（6）に同じ
- (14) 奥野健男「作家と作品・室生犀星」、『日本文学全集・33・室生犀星集』（集英社、1968）
- (15) 東郷克美「犀星の小説の方法」、『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂、1978）
- (16) 奥野健男「室生犀星入門」、『室生犀星評価の変遷』（三弥井書店、1986）
- (17) 尾崎士朗「『聖処女』を評す」、『新潮』（新潮社、1938）
- (18) 船登芳雄「室生犀星における出生の内的相克と作品」、『日本文学』（日本文学協会、1979）
- (19) 東郷克美「『あにいうと』の成立」、『日本近代文学』第10集（日本近代文学会、1947）
- (20) 室生犀星「作中の女性」、『印刷庭園』（竹村書房、1935）
- (21) 沢田繁春「市井鬼物のエネルギー」、『論集 室生犀星の世界・下』（龍書房、2000）
- (22) 注（6）に同じ
- (23) 室生犀星「序」、『復讐』（竹村書房、1935）
- (24) 注（7）に同じ

謝辞

本稿作成の段階においていろいろとご指導を頂き、そして資料も多く提供して頂いた飯田祐子先生と金沢学院短大の笠森勇先生に心から厚くお礼を申し上げる。

本稿における誤りなどはすべて筆者の責任である。

（原稿受理 2001年11月30日）